

平城遷都を考える

和田 萃

はじめに

『続日本紀』の和銅三年（七一〇）三月十日条に、「始めて都を平城に遷す。左大臣正二位石上朝臣麿を以て留守となす」とみえる。まことに簡略な記事で、遷都に際し盛大な儀式が行なわれた形跡がない。

よく知られているように、『万葉集』巻一―七八の題詞には、「和銅三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷りましし時に、御輿を長屋の原に停めて迺かに古郷を望みて作る歌」とみえ、和銅三年二月のこととする。平城遷都に際し、元明天皇は藤原京から中ツ道をとり、平城京へ到ったことを示して興味深いが、遷都の時期を同年二月とし、『続日本紀』の記述とは異なっている。どちらが正しいのか、どうして異同を生じたのか、問題を残している。

一般的には『続日本紀』の記事を以て、平城遷都の日としている。筆者も、当然のこととして疑問を抱くことはなかった。しかし余りにも簡略な記事であることと、後でふれるように「御す」と「幸す」の違いをあれこれ考えるうちに、再検討の余地があるのでは、と考えるようになった。以下、その一端を述べ、識者の御教示を得たく思う。

持統八年（六九四）十二月六日、持統天皇は飛鳥浄御原宮から「藤原宮へ遷居」した。そして九日に百官は拝朝している。飛鳥浄御原宮から藤原京への遷都を祝した儀式とみてよい。以下、混乱を避けるため、飛鳥浄御原宮から藤原京へ遷った事例や、逆に平城京から恭仁宮へ遷った事例も、「遷都」と表現して記述する。

飛鳥浄御原宮は、近年の発掘調査により飛鳥京跡の上層B期の遺構であることが確定した。飛鳥京跡から藤原宮の

大極殿跡までは、歩いて一時間ほどの所である。遷都に際し、長い列が遅々として進まなかったとしても、半日もあれば十分で、ごく近い場所への遷都であった。天武十一年、十三三年頃、天武天皇は新城（新）や京師へ行幸・巡行しているが、近年の発掘調査成果により、それらは後の藤原京域を指していることが明らかになった。その意味では、持統八年十二月の藤原遷都は、従来の歴代遷宮と同じような意識で実施された可能性もある。平城遷都は、藤原京から遠く離れた奈良盆地北端部への遷都であり、従前とは状況が全く異なっていた。

藤原京への遷都に際し、志貴皇子の詠んだ「明日香風の歌」(『万葉集』巻一―五一)が人口に膾炙する。

明日香宮より藤原宮に遷居うつりし後、志貴皇子の御み作歌

采女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く
「雅で美しい采女の袖を吹き返していた、飛鳥で吹く明日香風は、藤原宮へ都が遷つてからは、ただ空しく吹いているだけだ」と歌う。飛鳥では、飛鳥特有の「明日香風」が吹くのに、藤原の地で吹く風には特色がない、との口吻が感じられる。その背景には、飛鳥と藤原では風土が違う、風の吹き様も地味も異なる、との認識があるのだろう。

今でも飛鳥では、夏であれば飛鳥川沿いを、朝は下流域

から上流域へ風(谷風)が吹き上り、夜になると逆に上流から下流へ風(山風)が吹く。これが明日香風。ほぼ平坦地である藤原京域では、そうした特有の風は吹かない。

『万葉集』巻一―七八の題詞にみえる藤原京から平城京への遷都は、飛鳥浄御原宮から藤原宮への遷都とは全く違っていた。輿に乗った元明天皇は、皇族・貴族や下級官人たちを具し、威儀を正して平城京へ向かったから、二日がかりの遷都だったと考えられる。また日を変えて、従駕した人々の家族や従者たち、藤原京とその周辺地域に住んだ多くの人々も、家族を挙げて、また家財道具一切を所持して、平城京に向かったとみてよい。二、三カ月を要した、大移動だったのである。それらが全て完了したのが和銅三年三月十日のことであった。『続日本紀』の同年三月十日条に、「始めて都を平城に遷す。左大臣正二位石上朝臣磨を以て留守となす」との記事は、遷都に関わる一切のことが完了した日を示している。

『万葉集』巻一―七八の題詞にみえる「長屋の原」は、山辺郡長屋郷の地。天理市西長柄町（にががら）から同市西井戸堂町にかけての一带だから、平城遷都に際しては、元明天皇以下の人々は中ツ道を取り、平城京へ向かったとみてよい。

これまで私は大和の古道を、ほぼ歩き通している。ここ
で言う「古道」とは、古代に敷設ふせされた山辺の道、紀路、

横大路、筋違道（太子道）、上・中・下ッ道などを指す。

その実体験からすると、横大路に取り付く中ッ道付近（横原市石原田町・桜井市西之宮）から、奈良市北ノ庄町の五徳池まで、一日で歩き通すことも不可能ではない。季節にもよるが、途中で何度か休息をとり、また風景を楽しみながら歩くとすれば、二回に分けて歩くのが望ましい。寛弘四年（一〇〇七）三月、藤原道長は南都から飛鳥に向かう途中、天理市西井戸堂町の山辺御県神社境内の観音堂に参籠し、一泊している事例も参考になる。

なお平城遷都に際し、下ッ道を取ったとの想定もありうる。しかし寺川や飛鳥川などは、平安後期に流路を下ッ道に沿って北流するように付け替えられた。それ以前は奈良盆地東南部から北西方向に流れる自然流路であったため、川幅も広く架橋の必要があり、あるいは川舟で渡らなければならなかった。中ッ道だと川幅も狭く歩きやすい。そうした点からも、平城遷都には中ッ道を用いたと考える。

平城宮への行幸

和銅元年（七〇八）九月十四日から、元明天皇は菅原・平城・山背国相楽郡の岡田離宮・春日離宮に行幸し、同月二十八日に還幸した。和銅二年（七〇九）八月二十八日も平城宮に行幸し、九月五日に還幸した。

また同年十二月五日に平城宮に行幸したが、藤原宮へ還幸した記事はない。そして和銅三年（七一〇）正月朔日に、元明天皇は大極殿に御して群臣から朝賀を受け、左右將軍らは皇城門外の朱雀路の東西に騎兵を整列させ、隼人や蝦夷らを率いて行進している。また正月十六日には、天皇は重閣門に御して、宴を文武百官と隼人・蝦夷らに賜った。

和銅三年（七一〇）正月朔日条にみえる大極殿については、平城宮の大極殿とする説と、藤原宮の大極殿とする二説がある。藤原宮の大極殿とすると、正月十六日条の元明天皇が重閣門に御しての記事も、藤原宮でのことになる。和銅二年十二月五日に平城宮へ行幸したが、藤原宮へ還幸していない。還幸記事が欠失している可能性もあるが、その場合にも、その後平城宮へ行幸した記事があつて然るべきと思われるが、見えない。

やはり和銅二年十二月五日に平城宮へ行幸したまま、藤原宮へ還幸することはなかったと考えられる。和銅三年正月朔日に朝賀が行なわれ、皇城門外朱雀路での騎兵や隼人・蝦夷らの行進があり、十六日には天皇は重閣門に出御し、文武百官や隼人・蝦夷らに宴を賜った。平城遷都を寿ぐ宴だったとみてよい。平城宮の重閣門については、『続日本紀』の宝龜八年五月七日条、延暦元年四月十二日条にもみえ、また神龜元年五月五日条には重閣中門がみえてい

る。

「御す」と「幸す」

「御す」と「幸す」については、これまで余り注意されていないように思う。

『日本書紀』以下の六国史には、天皇が宮内の殿舎や施設に出御する場合は「御す」、宮外や他国に行幸する場合には「幸す」と表記している。一般的には宮内と宮外の違いによる表現とされているが、両者には本質的な違いがある。それは行幸には必ず劍璽動座を伴うことであり、行幸に際しては、宝劍を奉じる侍従と神璽を奉じる侍従が必ず天皇の前後に付き随ったことである。

宝劍と神璽は、常に天皇の側近くに置かれるもので、三種の神器の内に含まれる。三種の神器は二セットあり、一つは、伊勢神宮の八咫鏡、熱田神宮の草薙劍、天皇のもとにある神璽（八尺瓊勾玉）、もう一つは、宮中の賢所に奉安されている鏡、天皇のもとにある劍と神璽であり、神璽のみは同一のものである。⁽³⁾

古代において、行幸に際し劍璽動座が行なわれたことを明瞭に示す史料はない。しかし『延喜式』や『西宮記』には関連史料がみえる。近世には行幸に際し、天皇の前に御劍内侍、天皇の後に御璽内侍が従った（『外記局記録』）。

近現代にも行幸に際し劍璽動座があり、戦後は一九七四年十一月七日に天皇・皇后が伊勢神宮に参拝された際、劍璽動座が行なわれたのみである。

行幸には劍璽動座を伴ったので、行幸と還幸の記事が記された。もともと『日本書紀』では、還幸の記事を欠くこともある。例えば持統天皇の吉野宮行幸は、在位中、三一回にも及んだが、還幸の記事は八回欠けている。「御す」と「幸す」をめぐっては、他にもいろいろ検討すべきことがある。別に小論を発表したので参照されたい。⁽⁴⁾

平城宮の大極殿

最近、平城宮の大極殿は和銅三年正月には未完成だったことが判明した。朱雀門の北にあった大極殿院南面回廊基壇の下層の整地土から、次の荷札木簡が出土したからである。

〔刀カ〕

（表）伊勢国安農郡阿□里阿斗部身

（裏）和銅三年□月
〔三カ〕

長さ二〇〇ミリ、幅二四ミリ、厚さ四ミリ

和銅三年三月に伊勢国から貢進された春米の荷札と推定されるもので、大極殿院の造営にたずさわっていた人たち

に食料として支給され、それを炊爨する際に取り外し、未整備の現場びばにゴミとして捨てられたものと推定されている。また平城宮の大極殿は、藤原宮の大極殿を移築したことが明らかにされており、平城宮大極殿の完成は和銅八年（七一五）正月のことであった。

しかしこの事実に基づき、和銅三年正月に藤原宮の大極殿で朝賀が行なわれたと断定するのは、少し問題があるように思う。なぜなら、これまでにも述べたように、和銅二年十二月五日の平城京への行幸については、藤原宮への還幸の記事がないからである。

憶測にすぎるが、『続日本紀』編纂時に平城宮の大安殿を大極殿と誤った可能性もあるかとも思う。和銅三年正月の時点で、天皇が日常生活する大安殿はすでに完成していたと考えられるから、大安殿で群臣から朝賀を受けたことも想定しうる。飛鳥浄御原宮では、朝賀ではないが、正月に内安殿や大安殿で諸王卿らに宴を賜った事例がみえている（天武十年正月七日、朱鳥元年正月十六日）。

小結

以下、和銅三年正月に平城宮大極殿が未完成であっても、朝賀を行ない得たことを簡略に述べる。組み立て式であった高御座が敷設され、天皇が登壇すれば、即位式や朝賀は

行ない得たからである。藤原京遷都以前の歴代遷宮の事例が想起される。

適地を占って壇を設け、大王が登壇して即位を宣する形式は、雄略朝に遡る（『日本書紀』雄略即位前紀）。そして壇を設けた地に宮が造営されたので、結果的には歴代遷宮となった。八角形で組み立て式の高御座を、壇上に敷設するようになった時期は未詳である。

内野で遊獵する舒明天皇に、中皇命が間人連老に命じて献呈した歌（『万葉集』卷一―三）に、「やすみしし わが大君の」の表現がみえ、「八隅知之 我大王乃」と表記することから推測すると、高御座は舒明朝に存在していた可能性がある。「八隅知之」は、国土の四方、八方を治める意で、列島は大八洲（国）から成ると意識されていたことに由来する。舒明陵（奈良県桜井市忍阪）が八角形墳であるのも、そうしたことに基づく。

乙巳の変後の孝徳朝に、中国的な朝賀式が導入された。大化二年・四年・五年、白雉元年・三年の正月朔日に、賀正礼・賀正を行なったことがみえている（『日本書紀』）。

孝徳朝から中国的な朝賀式が導入され、朝賀に際しても天皇が登壇して、高御座に出御する形式が生じた。天武朝に大極殿が出現すると、大極殿内に高御座を敷設し、即位式・朝賀式が行なわれるようになった。

何らかの事情で大極殿が無くても、壇上に高御座が敷設されて天皇が登壇すれば、朝賀は行なうことができた。和銅三年正月朔日の朝賀は、そうした事例とみなしうる。同様の事例は恭仁京遷都である。

天平十二年(七四〇)十二月六日、聖武天皇は東国行幸からの帰路、山背国相楽郡恭仁郷の地を訪ね、遷都することを思い立ち、天平十三年(七四一)正月朔日、始めて恭仁宮に御して朝賀を受けた。宮垣は未完成で、帷張を巡らせたにすぎなかった。もちろん大極殿はまだない。しかし朝賀は行なわれている。帷帳を巡らせた内に壇を築いて高御座を敷設し、聖武天皇が登壇して、群臣から朝賀を受けたのである。天平十六年(七四四)二月二十六日の難波遷都に際し、二月二十日に恭仁宮の高御座と大楯が難波宮に運ばれているから、恭仁宮に高御座があったことは確実である。

以上のことから、和銅三年正月朔日の朝賀は、平城宮で行なわれたと考える。平城遷都は、公式には和銅三年正月朔日のことであった。

註

(1) 近年における飛鳥京跡の発掘調査成果については、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館二〇〇八年秋

季特別展図録『宮都飛鳥』を参照。

(2) なお私はこれまで、大和の古道について、以下の論文を執筆しているので参考にされたい。和田萃「横大路とその周辺」(『古代文化』二六卷六号、一九七四年)。

「今に続く大和の古道」(『別冊太陽 奈良』一九七九年)。「史料からみた下ツ道」(『環境文化』第四〇号、『環境文化研究所』一九七九年)。「紀路と曾我川」(『古代の地方史』第三卷、朝倉書店、一九七九年)。「横大路と竹ノ内街道」(『環境文化』第四五号、『環境文化研究所』一九八〇年)。「中・近世の下ツ道」(『環境文化』第四五号、『環境文化研究所』一九八〇年)。「古道」(『国文学』二七卷五号、一九八二年)。「古代の横大路―初瀬道―」(奈良県文化財調査報告書第四一集、奈良県教育委員会、一九八三年)。「古代の田原本」(『田原本町史』本文編、一九八六年)。「山辺の道の歴史的意義」(「山辺の道―歴史散歩―」(和田萃編『古代を考える山辺の道』吉川弘文館、一九九九年)。「歴史の道を行く」(橿原市、二〇〇九年)。「中ツ道―現況と歴史的背景―」(『季刊明日香風』第一一四号、飛鳥保存財団、二〇一〇年)。「応神天皇の時代」(『季刊悠久』第一二二号、おうふう、二〇一〇年)。

(3) 和田萃「神器論」『天皇と王権を考える』2 統治と権力(岩波講座)岩波書店、二〇〇二年。

(4) 和田萃「御すと幸す」『古代学研究』第一八〇号(森浩「先生傘寿記念論文集」、二〇〇八年)。

- (5) 渡辺晃宏『平城京一三〇〇年「全検証」』第二章第七節、柏書房、二〇一〇年。
- (6) 高御座については、小論を参照されたい。和田萃「タカミクラ―朝賀・即位式をめぐって―」同『日本古代の儀礼と祭祀・信仰 上巻』所収、塙書房、一九九五年。